

KJ 法の実践

～『発想法—創造性開発のために』第3章のまとめ～

【第3章 発想をうながすKJ法】

- KJ法のための用意
 1. 黒鉛筆またはペン
 2. 赤・青などの色鉛筆
 3. クリップ多数
 4. ゴム輪多数
 5. 名刺大の紙片多数
 6. 図解用の半紙大の白紙
 7. 文書を書くための原稿用紙
 8. 紙きれ多数を拡げるための場所
- KJ法の実技紹介<会議をまとめる事例から>
- 内部探検：<目的>主題の明確化
 - 1.ブレインストーミングの精神で意見を出し合う（批判禁止）
 2. 主題に従い問題解決をするために「必要と思われる」事実や見解をできるだけ出して共同の財産として集積する
 3. 問題解決に対するアイデアをブレインストーミングの精神で集積する
- 発言のエッセンスを紙きれに記録
 - 一人の記録係を設ける
 - ◇ 名刺サイズのメモ用紙（紙きれ）に会議の各発言の内容をひと区切りの内容ごとに圧縮し「一行見出し」にして紙きれに記録する
 - ◇ 区切りの単純化と、一単位の圧縮化→両極端の中間にある、ある程度の単純化が望ましい
 - ◇ 2時間のブレインストーミングで紙きれは数十枚から百数十枚（1分間に1枚～2枚）
 - 一行見出しの書き方
 - ◇ 自分だけに分かる表現でメモをする
 - ◇ 記録をスピードアップするためには略語やイラストを使ってもよい
 - ◇ 必要に応じ、ハイフンを使って二段・三段と間配りよく書く
 - ◇ 一句・一言でキャッチできる表現がいい
 - 意味のエッセンスを作るとき
 - ◇ 過度に抽象化しない
 - ◇ 要点のエッセンスを書き留める
 - ◇ なるべく柔らかく、発言の肌触りができるだけ伝わるように書く
 - 一行見出し＝単純化・圧縮化＝コンセプト・フォーメーション＝概念づくり
- グループ編成
 1. 記録された紙きれをテーブルにお互いが重ならないように四角く詰めて並べる
 2. 紙きれを拡げたら、流し目でいいので紙きれたちを眺める
 3. 親近感を覚える紙きれ同士をチームとして一ヶ所にまとめる
 4. 数多くの小チームができれば、そのなかの一チームの紙片群を熟読し、「なぜ自分はここに五枚の紙片を集めたのか」と理性的に反問する→たまに、一ヶ所に集めていた間違いに気づく
 5. 五枚の内容を包みつつ、圧縮化して表現できる一行見出しを発見すれば、それを新しく別のメモ用紙に書いて五枚一組の

チームの紙片の上のせる（表札を作る）

6. 表札を書くときは今までの紙片と区別するために、例えば青鉛筆で書き、紙片五枚+表札をクリップで仮止めする
7. 小チームの編成が終われば、同じ手順で、中チーム、大チームと編成していく
8. チームの次元を識別するために、中チームは赤鉛筆で、大チームは赤鉛筆とその上に赤の輪どりをする
9. 中チームと大チームはクリップではなく、輪ゴムでまとめる
10. 最後に5~10の大チームを全て集め、その表札を考える=討論の主題の完成

● グループ編成の注意点

- 無理矢理「離れザル」をどれかのチームに入れるような不自然なことをやってはいけない
 - ◇ 中チームを編成するとき、もしくは大チームを編成するときに自然に入る
- 大分けから小分けでチーム編成をやってはいけない（→必ず小分けから大分けで編成する）
 - ◇ 専制的ではなく、民主的に！

● グループ編成の後

- KJ法A型：グループ編成をした材料に基づいて、図解に持っていく方法
- KJ法B型：グループ編成をした材料に基づいて、直接紙きれの資料を文章につないでいく方法
- KJ法AB型：グループ編成した材料をA型に従って図解し、それに基づいてB型に移行し文章化する方法
- KJ法BA型：まず文章化をして、B型の内容を次にA型の図解として展開する方法
 - ◇ BA型よりAB型の方が効率が良い

● KJ法A型図解法

1. 一チームの紙きれの束をもう一度取り出す
2. その中に含まれた紙きれ or 紙きれチームをもう一度机の上に並べる
3. そして内容（紙きれチームならば表札だけ）をよく読む
4. 紙きれをどのように空間的に並べたら、論理的にもっとも納得がいくかを考え、配置の仕方を探す
5. 「これが落ち着きのよい理解のしかたである」という空間的配置が見つかる（少なくとも1種類・2~3種類以上できる）
6. 空間配置が意味する内容をつぶやいてみて、違和感がないか確認する（→違和感があれば修正する）
7. 空間配置ができれば、清書用の白紙に空間配置が表すものを図解する
 - ◇ 一行見出しは輪で囲む
 - 一行見出しの間を棒線で繋ぐ（相互作用：←→、対立：>—<、原因・結果：—→）
 - 同類的な関係をグループ編成の原理に従い、リングで包みこむ

● 図解化の順序：大分けのチームの図解を行い、その後、中チーム、小チームと図解化する

- 大分けの図解シートが小分けの図解シートの索引となる
 - ◇ 細部的図解は必要に応じて別紙に書く
 - ◇ 細部的図解の中に原資料の通し番号を書いておくと便利（紙きれを作る際、一行見出しと通し番号を書いておく）
 - KJ法B型に移行する際、通し番号があると、文章化しつつ分析と総合を行うときに便利

● KJ法AB型による文章化

- どこから文章化したら良いか？→手順の計画づくりの技術：パート法（PERT）
 1. KJ法A型で図解化するまでに使ったもとの紙きれをもう一度図解を参考にしながら、実際にやる手順で紙きれを並べる
 2. 一挙に手順の系列を作るのではなく、前後関係で連結するにちがいない紙きれ同士を組み合わせ、全体の手順を構成する（→一種の粗略なパート法となり、本格的なパート法の骨格づくりとなる）
 3. これらの作業をすることにより、文章化する順番が見えてくる
 - KJ法A型による図解上に赤鉛筆で「ここからここへ」B型を用いて文章化してみようと考えたことは、粗略

なパート法と同じ効果を持つ

- 予想した書き順に固執するのではなく、途中で手順を変えながら文章化していく方が上手くいくことが多い
- 「図解上隣接的な近さにある情報の処理へと文章化を進める方がよい」という原則は守る

➤ 文章化と図解化

- ◇ 文章化は図解の持っている弱点を修正する力を持っている
 - 誤りを見破って、発見し、修正の道を暗示する力を持っている
- ◇ 図解化の長所は、瞬時に多くのものごとの間の関係が同時に分かること
- ◇ 文章化はものごとを前から後ろへと鎖状にしか関係付けられない
- ◇ 文章化と図解化は、互いに関係認知の方法だが、その性質は違う
 - 両者は互いに他方の欠陥を補強する力を持っている

➤ 文章化をするときの根本的な注意：叙述と解釈をハッキリ区別すること（+自他ともに分かる表現にすること）

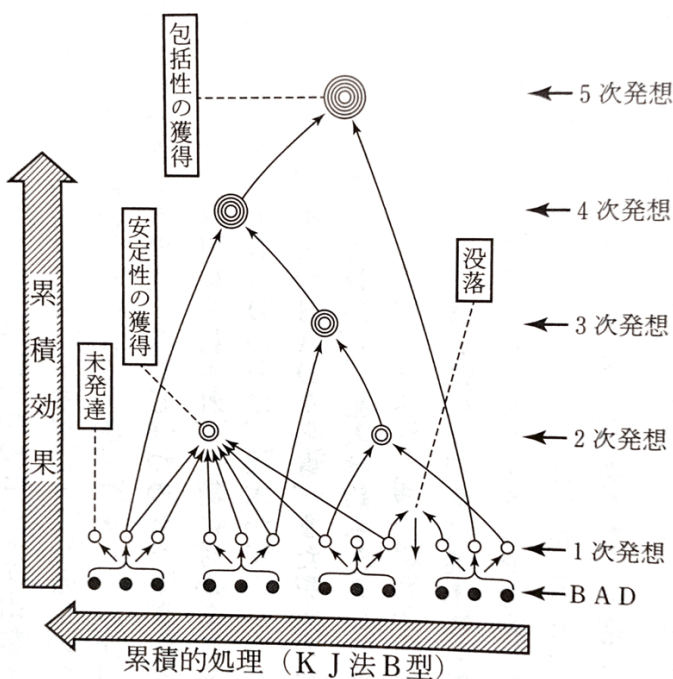
- ◇ 文章の中で、どこまでがデータを取りまとめて述べたことなのか（叙述）
- ◇ どこがそのデータに触発されて自分が考えた、独創ないしは解釈であるか（解釈）
 - 叙述と解釈を区別して文章化を行うためには、小データ群に対して鮮明な分析が必要である
 - 叙述と解釈をハッキリ区別した上での主観的解釈はおおいに必要であり、有益なものである

● 基本的発想データ群（BAD）

- BAD=ベーシック・アブダクティブ・データ
- BADの基準：机の上にそれだけのデータを並べてみて、同時にそれらが考慮の中に入れられる程度の複雑さである
- BADを同時に考慮に載せると、ふしぎなことに、今まで気づかなかった幾つものまとまったヒントを与えてくる
 - ◇ 収束性思考：一個のBADから一個のヒントが自然に暗示される
 - ◇ 発散性思考：一個のBADから幾つものヒントが飛び出す
 - ◇ 収束性思考と発散性思考の両方が行われる場合もある

● ヒントの干渉作用

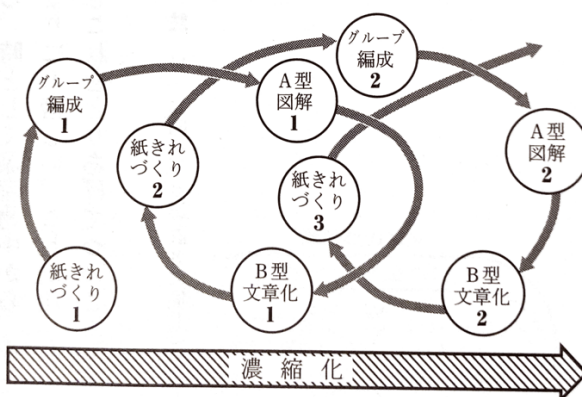
第10図 干渉作用の4つの場合



1. 没落：ヒント間が相矛盾して相共に没落して影が薄くなる場合
2. 未発達：干渉作用が発展しない場合

3. 安定性の獲得：幾つかのヒントが一致してその結果安定性を獲得する場合
 4. 包括性の獲得：幾つかのヒントが総合されて包括性を獲得し、高次のヒントがしだいに高く打ちあげられる場合
 - ◇ 以上のような四種の干渉作用がBADを次々と叙述的に処理していく中で、累積的に進行する
- 干渉作用の累積的な効果をできるだけ有効に発揮できるようにするには？
 - KJ法A型の図解を利用して、なるべく隣接地区へとBADの処理を進めた場合に、累積効果ももっとも多く、もっとも早くおこる傾向がある
 - KJ法AB型によるBADの干渉作用の累積効果
 1. 小さなヒントが次々とおびただしく発散される
 2. それらの小ヒント間に次々と自由競争がおこる
 - A) その結果、一方ではだめなヒントがどんどん没落する
 - B) 他方では、伸びるべきヒントはだんだん安定性と包括性を増しつつ統合される
 3. 自由競争が進むと、小さなヒントのなかから中ヒントが生まれ、さらに大ヒントが生まれる
 4. 大ヒントともなれば、それは小仮説と呼ぶにふさわしくなる
 5. そして、さらに中仮説になり、大仮説に成長し、ついには雄大な仮説が打ち上げられる
 - 累積的KJ法
 - KJ法AB型のさらに一つ先の方法
 - ◇ 「紙きれづくり→グループ編成→A型図解→B型文章化」という一サイクルを累積的に幾つも重ねる方法

第12図 累積的KJ法



- ◇ 普通は、KJ法AB型を使って第一ラウンドをやるだけで十分
 - 第二、第三ラウンドを重ねたほうがよいのは、非常に複雑で多量のデータを緻密に処理していく場合
- 発想法以後
 - 大仮説の評価
 - ◇ 仮説発見型の野外科学的方法（発想法）から、仮説検証型の実験科学的方法へ切り替える
 - 副産物処理の段階
 - ◇ 大小多くの仮説は、多くが最初の問題提起となんらかのかかわりを持つ
 - ◇ 幾つかのものは、問題提起と無関係な、一種の副産物である
 - ◇ 時としてその副産物の中から、すばらしいものが生まれる
 - ◇ 副産物の処理が必要になる